

# 酪農と自転車とスケートと…

酪農家 吉川友二

## お家騒動記

足寄の町から陸別へ向う国道を左に折れて少し行くと人家がなくなる。そこから山林を流れる谷川の急峻な壁を削って作られた道をしばらくのぼっていくと牧草地があらわれる。戦前は軍馬補充部として利用され、戦後に農地として開拓された土地が広がっている。松山千春の『大空と大地の中で』が生まれた舞台である。はるか彼方に阿寒岳・日高山脈・東大雪山を望むことができる。そこに住んでいると、まるでアニメ映画の『天空の城ラピュタ』に出てくる、廃墟になって樹木に覆われた、空に浮かぶ「ラピュタ」に住んでいるようだ。

戦後開拓の当時は豆、芋、蕎麦とすべての農作物を試したそうだが、今はすべての農家が肉牛または酪農という牧草と家畜を利用した草地畜産農業を営んでいる。気が厳しくて畑作には向かないのだ。その戦後開拓地の一つである私のいる植坂集落は長野県から三十七戸が開拓に入ったが、今に残っているのは二戸のみである。そして私のように後から入って現在農業を営んでいる農家と合わせて、六戸の農家と一法人が農業を営んでいる。

二〇〇〇年の六月に足寄町へ移住してきた。その時に足寄町では酪農で新規就農するのは二十九年振りだと言われた。その年の十二月には戦後開拓のご苦労をされ、家族を立派に育てられた木下利夫・千春さんが足寄の街に下り、代わって私が山に移り住んだ。その家では妻との出会いと結婚があり、五人の子供たちが生まれ育った。そして十二年間お世話になった思い出の家を出て、新しく建てた家に移り住むことができた。

家族がこの気候の厳しい山の中で豊かに暮らしているのも牛と草のお蔭、消費者の方々と農業を支えてくれる日本の皆さん（自分の払った税金以上に補助金を頂いています）のお蔭であり、感謝している。

黒澤西蔵さんのお孫さんの牧場を由仁町に訪ねたのは、二〇〇八年が明けてすぐである。西蔵さんは明治十八年（一八八五年）に茨城県で生まれた。一九〇九年に札幌の中島公園近くの山鼻村で乳牛一頭を借り受けて酪



農を始めた。百年前は大通り公園でも牛が放牧されていたくらいで、中島公園付近はさみしい農村であったそうだ。その後宇都宮仙太郎さん、佐藤善七さん（三人とも新規就農者の仲間として、親しみを込めて「さん」と呼ばせてもらいます）と共に北海道酪農の三羽鳥と呼ばれ、黒澤さんが中心となって北海道の酪農家自身が今の雪印乳業や酪農学園大学を創った。彼がいなかったら今の北海道の酪農はこれほどまでに発展していなかったことは間違いない。一人の男がこれだけの仕事を何故成し遂げられたのかをお孫さんに会ってお聞きした。

その帰り道、国道沿いに住宅メーカーの「木の城大雪」のたしか「もつたいたいランド」と書かれた看板を偶然見かけた。妻の出身地の富山県は、持ち家率が全国一である。富山に帰省して妻の友人達に会うと、次々と家を新築していた。結婚して夫婦共働きで貯蓄が出来、子供も生まれ、家を建てるのに丁度良い年齢なのだろう。妻は家を建てることを真剣に考えていたのかもしれないが、私は就農して借金もあるし、家はまだまだ先の話だと思っていた。

もう冬の夕暮れが迫っている。お世話になってる獣医さんの家が「木の城大雪」で建てた家ということもあり、前から知っていた北海道の大きな住宅メーカーである。「もつたいたいランド」とはなんだろうと、頭の中

は「はてなマーク」が点灯している。帰るのは遅くなるが、〇歳、二歳、三歳、四歳の四人の子供たちを車に乗せて、Uターンをした。今にして思えば、そこでハンドルを切らなければ、住宅の夢はまだしばらくの間、夢のままであったらう。

寄り道が出来たというのも、冬の間は搾乳をしていないからだ。大晦日の朝の搾乳が終わると、すべての牛たちを乾乳にあげてしまう。乾乳とは母牛が子牛を再度分娩して、お乳を出し始める前に二ヶ月間ていど、乳を搾らずに乳房を休めることである。人間と同じで牛も子供を産まない乳を出さない。お正月からは搾乳はお休みで、分娩の始まる二月の終わり頃まで搾乳の仕事がない。朝晩の餌やり、水やり、ウンコ出しの仕事だけである。そしてその日は遠出をするので、夕方餌をやらなくてもすむように、早起きをして草だけは沢山やって出て来た。

入り口の看板を入ってみると、大きな木材工場の中で働いている数人がオレンジ色の灯りに照らされている。案内の表示に従って駐車場へ車を進めて、正面の建物に入る。そこは見学コースがあったり、何棟かの展示住宅があったりと小さなテーマパークのようである。私達以外にも二、三組の見学者がいる。案内の人に連れられて見学コースを周り、最後には生まれて初めて住宅見学なるものをした。出るときにはあたりはすっかり冬の夕闇

に包まれていた。

そんなきっかけができて、分婉シーズンが終わり、雪が融けて初夏の日差し頃、帯広の「木の城大雪」の展示住宅や集合住宅展示場へ家族で足を運んだ。どこの住宅見学をするときも、いつでも子供達と一緒に行ったのは今してみればいい思い出だ。「木の城大雪」の創業者の書いた本を読んで彼の生い立ち、創業の苦労と努力、彼の北海道の住宅に対する思いに感銘をし「木の城大雪」にしようかとほぼ決めていたら、倒産のニュースが大きく報じられた。

名古屋の知人に、札幌にある建築工房の社長さんを紹介された。札幌の社長さんは私と同じ年で、設計や見積もり住宅見学などとお世話になった。また別に、上士幌町に住む妻の友人から、彼女がこれから家を建ててもらう予定をしている帯広の久慈建築工房の社長さんを紹介してもらった。久慈さんが建てた家を見学させてもらうと、住宅展示場で見たとような規格品ではなく、一つ一つの家にそれぞれの個性があった。札幌から足寄まで大工さんを通わせたら可哀想だよねと久慈さんに家の新築をお願いすることに決めた。

久慈さんに新しい家の図面をかいてもらい、ああでもない、こうでもない、ああしたい、こうしたい、といういろいろ直してもらっていると札幌の建築会社も倒産し

たことを銀行の方から聞いた。建築業界の方々も厳しいですね。

その間には、どこに家を建てるのかで妻ともめて、妻が家を出て行きそうになる騒ぎにもなった。農家は土地が広いので贅沢な悩みです。結局、農地には家を建てはいけないという法律のお蔭で、山の尾根上に見晴らしが良い原野に建てる以外はなくなり、事件は落着いた。

本当に家が建つのだろうかと思う時もあったが、久慈さんの物事に動じない肝っ玉の太さのお蔭で、二〇一年の秋にようやく着工することが出来た。今にして思うと、家作りは家の見た目で決めるより、信頼できる社長さんで決めること。そして家作りは人生のドラマの中でも大きなイベントでお金もかかるのだから、誰に頼むにしても、失敗を恐れずに、もっともつと自分の夢や思い理想など、遠慮なく自分を表現して楽しんでいい。今は今のベストを尽くして、次にもう一つ家を建てるくらいの楽な気持ちで丁度いい。

着工までに、あの冬の思い出の旅から四年が過ぎていた。この騒動記のもとを正すと、黒澤西蔵さんのお孫さんの牧場で働いていた元気な若い女性が、あの冬の旅の一ヶ月前に我が家を訪ねてくれたことに始まる。彼女のお蔭で西蔵さんの存在を知り、彼の本を読み、彼のお孫さんの牧場を訪ね、そして「もったいないランド」の看

板を目にしたというわけだ。

着工から一年をかけて二〇一二年の十月に新居が完成した。もとの家では子供たち四人が寒い朝起きてくると、みんなストーブの前で肩を寄せ合ってぐるぐると場所争いをするのが我が家の冬の情景であったが、それがなくなった。新しい家に引越す前は目を覚ますと今朝はどれくらい寒いのがすぐに分かったが、新しい家では外の温度計を見るまで分からない。

新しい家のトイレは水洗になり、ウォシュレットがついている。仕事前にトイレに行くわけだが、あわただしくて最初のうちはウォシュレットを使わなかった。試しにウォシュレットを使ってみたら、そのうちにかかせなくなった。

朝仕事に行く前に便座に座り用事を足す。用事はあつという間に終わる。その後ウォシュレットで念入りにお尻を洗いながら、トイレトペーパーを引き出してたたみ、眼鏡を拭いて、目やにを拭き取る。それからウォシュレットのスイッチをオフにして、そのトイレトペーパーでお尻を拭いてズボンを上げる。それからトイレの床に膝をつけて、同じ紙で床を拭き便器も拭く。最後にその紙を捨てて水を流す。風邪でもひいていたらこの作業の中のどこかで鼻もかんでいるかもしれない。それにして

もウォシュレットはお尻が快適ですね。これだけ急速に普及したわけがわかります。

と長々と下世話な話をしてしまったのも、こんな日常生活に自分の性格が良く現れているのが面白いと思ったからだ。家に住んでいると、家を作った大工さんたちの魂を感じる。そしてこれからは、いろいろな個性を持った一人一人の私達家族が家に魂を吹き込み、家に歴史を刻んでいくのだろう。

### 自転車

私が自転車に乗り始めたのは三年前。今、小学四年生になる長男の元（はじめ）が二年生になった時である。富山の甥っ子のお下がりに乗っていたウルトラマンの自転車（バイク）が小さくなったので、飛び切りかっこいいマウンテンバイクの自転車を買ってやった。元がそれをあまりにも楽しそうに乗っていたので自分も乗りたくなった。同じ自転車屋さんで見て一目惚れをしたロードバイク（昔で言うところのドロップハンドルでタイヤの細い自転車）を自分も買った。

自転車というと、今はお亡くなりになられたが、隣にある牧場に住んでいた木下宗雄さん。宗雄さんは私の牧場を開拓した利夫さんのお兄さん。私が就農した頃は、ゲートボールをしに自転車で芽登の町まで通っていた。

芽登までは十キロ弱の距離があり、かなりの傾斜がある坂だ。ある雨の降る日に、宗雄さんがカッパを着て片手にゲートボールのクラブを持って自転車で坂を登っているのを見てビックリした。開拓者のお年寄りには筋金入だ。それを見た時は自分がそんなことをしようなんて思いもしなかった。就農した当時はまだ自分の仕事だけで一杯で、自分もしてみようと思うだけの心の余裕がなかった。少しの暇があれば休んでいた。

自転車を買った年の二〇一〇年の秋、第一回目の美瑛センチュリーライドという自転車の大会に参加した。センチュリーライドと言うのは、競争ではなく、百六十キロ（百マイル）をみんなですぐ走ろうという大会だ。

大会は土曜と日曜の二日間にまたがっている。家族の一泊旅行をかねて出かけた。初日は午後から六十キロを走り、翌日は朝から百キロを走る。新得まで八十キロを走ったのが最長距離で、一日で百キロ走るのは未知の



領域だ。

宿泊先から、スタート会場まで二十キロ近くある。朝まだ少し暗いうちに自転車で会場に向う。会場の陸上競技場はまだ人がまばらだ。大会を盛り上げるために来てくれている高校生のブラスバンドがりハーサルをしている。オペラの前奏曲だろうか、その情熱的で悲しくもある曲を聞いていると、自然と涙が流れてきた。自分の好きなことをするためだけに、丸々一日を一人だけで使えるなんて、何年振りであろうか。こんな幸せを六年半前に二歳の誕生日を迎えて直ぐに亡くした娘と分かち合えたらと思うと、ますます涙が溢れてきて会場の外へ出た。

大会の一日目もそうだったが、長距離を自転車で走ると腰が痛くなって、乗っているのが苦痛になる。あまりにも痛くなり、会場まで自転車で来たのを後悔する始末だ。休憩の時にこの大会に指導員として長野県の安曇野から来ていた堂城（たかぎ）さんに腰痛の相談をした。腰痛の原因は、自転車の本に書いてあった姿勢を無理にしていたからだ。間違った指導をしている本を読んで、初心者の私は疑いもせずに鵜呑みにしていたのだ。この本の著者は自転車業界の中では結構幅をきかしている人で、この指導で苦しんでいる人、これで自転車を始めたけど大変で止めてしまった人も多いと思う。自分が楽に乗れる自然体が一番いい。この大会に思い切って参加し

たこと、そして思い切つて堂城さんに話しかけた幸運で、子供の時にそうであつたように、自転車がずっと身近で日常生活の当たり前なものになった。

翌年の第二回美瑛センチューライドは、元と一緒に二人で百キロを走つた。自転車は鳥の翼のように自由を与えてくれる。用事があるときに自転車で旭川まで行ったり、札幌から帰つて来たりした。

自転車を始めて三年目の二〇一二年にはロードバイクの競技に初めて参加した。丸瀬布、帯広市、豊富町で開かれた大会に参加し、九月にはツールド北海道に参加した。東川町から美瑛町までの八十七キロ。ゴールまで二十キロという所で、突然目の前で転んだ自転車にぶつかり転倒した。時速五十キロ位は出ていただろうか。まだ走るつもりで、前輪を交換しようとしたら、前輪をはさむフォークが折れていてポロリと落ちた。やむなく棄権をした。

帰りの車に乗る頃になると痛みを感じるようになって、車に乗るのもやつととなつた。家に帰つてからは二週間ほど、寝返りをうつのも辛い毎日であつた。第三回美瑛センチューライドを元とまた出ようと計画していたが、キャンセルすることになった。

かなり痛い目を見たが、自転車競技を始めたことには思わぬ効用があつた。五年ほど前から人間ドックを受け

ている。ここ二年は血液の脂肪が高いと再検査を受けさせられた。もう少し検査結果が高いと、高脂血症の薬を飲んでもらうとおどされる。もう若くはないということですね。

やせているし、仕事で体を動かしているので、何を食べるとか、食べる順番だとか、食べる量とか考えたこともなかった。そして、なかなか腹八分目で我慢できずに腹いっぱい食べてしまう。典型的なやせの大食いだ。食べることは、ストレス神経である交感神経を、リラックス神経である副交感神経に切り替えるスイッチの働きがある。そしてストレス解消のために食べ過ぎてしまうのだ。

ところが自転車の競技を始めると、まず腹八分目で我慢することが、不思議と、それほど苦でもなくなつた。自転車のロード競技で勝つためには上り坂で有利になるように体が軽い必要があると本で読んだからだ。

次に姿勢が良くなつた。自転車に乗っている前かがみの姿勢を維持するためには背すじの筋力が必要である。その背筋を鍛えるために日常の姿勢を良くするように心がけた。食事の時間だけでも背筋を伸ばしてご飯を食べる。そうするとご飯がますます美味しく感ぜられる。姿勢を良くして歩いているだけで世界が少し明るく、今ま

でとなにか違って見えてくるから面白い。

そしてもう一つ、心がけるようになったのは、呼吸をゆっくりすることである。自転車の競技やトレーニングでは心臓に負担をかけるので、普段は少しでもゆったりと呼吸をして、気を長く持てば、長生き（息）できるんじゃないかと思つてのことである。

今年（二〇一三年）のお正月明けの人間ドックで、初めて血液検査の結果が良くなった。五十歳近くになってから検査結果を良くするのは難しいものだと誉められた。今年の間ドックの検査がひと通り終わって、その結果が出て指導を受ける前の昼休みの待ち時間に、本屋へ行った。その本屋で「帯広喜久屋書店のオススメNo.1」と宣伝していた『「食べない」健康法』（石原結實 P H P 文庫）という本と、本の帯にAmazon家庭医学・健康部門一位の著者と書いてあった『ねこ背が治って心も体も強くなる』（小池義孝 王様文庫 三笠書房）という本を買った。その二冊の本によると「小食こそが健康の一番のクスリ」、「心と体は表裏一体」で心が前向きになるとねこ背が治るそうです。

仕事ばかりしていた時は、仕事で疲れたと言っていた。しかし時間を見つけて自転車のトレーニングとして芽登の坂を往復するようになると、首や腰の痛みや疲れがなくなった。そして仕事の途中に、坂道を見ると突然走り

出したりするようになった。同じ仕事でも、これがトレーニングだと思つてすると疲れない。かえって元気になるから、人間つて面白い。

### スケート

元が芽登小学校に入学した年、冬休みを目前にして、学校でスケート教室があった。スケート教室に町から指導に来てくれた先生（オリンピック選手だった）に抱えられて立ち上がり、放すとまたぺちゃんこつぶれてしまふ。その繰り返し。元はスケートが生まれて初めてである。他の一年生はそれなりに滑れている。今まで足寄町のスケート場がどこにあるのかすら知らなかった。私は長野県の上田市生まれでスケート靴を履いたことがある程度。休みの日に歩いて一時間以上かかる湖のスケート場まで、両親と兄の四人で道草を食いながら歩いて行って帰ってきたのが、目的のスケートよりも楽しい思い出だ。

初めてスケートをしたときの元の姿を見てから、小学校が終わる時間に元を迎えに行つて一緒にスケートをした。そしてスケートのシーズンを締めくくる小学校のスケート記録会。参加したお父さん達がスケートを滑るのを見てびっくりした。まるで弾丸のように目の前を走っていく。スピードスケートの世界では十勝を制する者は

世界を制すると言われるのだそうだ。私はというとこの記録会に参加し、コーナーを曲がる時に足首をねんざしてなかなか直らずに一年近くいたい思いをした。それでも気を長く持つて養生していればいつかは治るのですから人間の体（自然）って素晴らしい。

スケートを始めてみるとこれほど楽しい事はない。一蹴り、一蹴りのバランスを取るのに真剣白羽取りのような真剣さを要求される。どれくらい難しいかと言うと、長野オリンピックで金メダルを取った清水選手が選手生活を振り返って、「ミスのない五百mのレースは一度もなかったな」と言っているのをユーチューブ（インターネットで見るビデオのような物）で見た。引越した家は尾根の上にあるので携帯の電波が入るようになって、初めてユーチューブというものを見ました。

スケートの楽しさはまず、一日練習をすると一日分だけ翌日には上達が感じられること。次に面白いことは、前の年に上達してできるようになったところから、翌年また始められる所だ。冬になってリンクができて、シーズン初めてスケートをする時、自分でもアレッと不思議に思うほど昨年と同じ感じで滑ることができる。英単語の暗記のように一年も経つと大半忘れてしまつて、一から出直しということがない。スケートは今年頑張つておくと来年が楽だ。

このスケートの上達体験は、斎藤一人さんの教えるしあわせのしくみとよく似ている（『変な人の書いた世の中のしくみ』サンマーク出版）。

まずスケートは一日練習をすると一日分上達すること。この本を読んでから、朝目が覚めると、「今日が最高」と自分に声をかける。昨日一日の経験を積んだ分だけ、今日を人生最高の日にできる。毎日の目標は、ほんの少しでも明るく、ほんの少しでも人にやさしくすることである。しかし腹を立てたときもイライラしてしまつた時も、笑つて自分を許してやる。自分にやさしくが一番大切である。野草がアスファルトを突き破つて生長できるのは、一日の生長が無限小だからだ。生長しすぎるとアスファルトに頭をぶつけて死んでしまう。

次にスケートは今年練習をしておく来年が楽なこと。百歳近いお坊さんが英語の勉強を始めた。それを見た周りの人たちが今からでは遅いでしょうと言つたら、その人はひと言「来世、楽だから」と言つたそうだ。しあわせになるしくみは、視野を広げることだそうだ。前世があつて、今世があつて、来世がある。死んだら天国があつて、地獄がある。今世だけでは視野が狭い。「目に見えるものだけを信じて生きるつて、視野が狭いよね」。「人生がすごく味気ないものになっちゃう」。



## 酪農

ここで書き終えてしまうと遊んでばかりいると思われるので、最後に本業の酪農の話……、と書いて書き始めると、とても長い話になってしまいました。酪農家が何を考えて農業をしているのか、頭の中をのぞいて見た人は読んでください。それではよろしくおねがいします。

酪農をはじめて十二年になるが、酪農をやればやるほど牛に穀物飼料を与えるのはおかしいと思うようになる。牛には人間には食べられない草を、人間が食べられる乳や肉に変える事ができるという素晴らしい能力があるか



らだ。そして穀物をやって儲かればまだ救われるが、かえって多くの農家の経営を悪くしているからよけいと思う。

北海道で酪農が始まって以来、すべての酪農家が放牧をしていた。しかし、現在では北海道で放牧をしている農家は一割に満たない。なぜみんな放牧をやめてしまったのか。それは国が一头当たりの乳量が多ければ多いほど儲かる、乳量の出ない放牧は遅れた技術だ、舎飼をしてどんだん栄養価値の高い穀物飼料を与えて乳を搾れ、と間違った指導してきたからだ（そして現在もしている）。

放牧をしている酪農家の経営の優位性は足寄町放牧酪農研究会の成功が示している。この会は一九九六年（平成八年）に七戸の酪農家で結成された。会員仲間では家族でニュージールランドへ行こう会と呼ばれている。この会の会員に聞き書きをした『草の牛乳』（野原由香利農文協）という本には、一头当たりの乳量を追求すれば儲かると信じて朝から晩まで働いて（子供の運動会の時も途中で餌やりに戻らなければならなかった）赤字を続けてきた農家が、放牧酪農に転換してやっと経営が黒字になった話が書かれている。そして働きづめの生活から解放され、生活にもゆとりができた。放牧酪農が農家の経営と生活を救ったわけだ。

放牧酪農の経営は、所得率を上げることによって所得

を増やすという特徴がある。そのために一頭当たりの乳量を増やしたり、規模拡大をして生産量を増やす必要がなくなる。足寄の研究會七戸の平均を見ると、放牧を始める前の九六年の経産牛一頭当たりの所得は十六万円、放牧を始めた後の〇四年は二十七万円である。購入飼料費は三十一%減少している。

私が足寄に来た十二年前には農業経営学者がこのような成果を見て、放牧を評価してくれるようになっていた。しかし一向に放牧が普及する流れにはならないのが現状だ。

放牧の経営的な優位性と書いたが、放牧酪農（ヤギや羊も含めて）は「奇跡の農法」であると言いたい。有史以前から、畑作が不可能な気候条件の厳しい土地（冷涼・乾燥・山岳地帯）で人類が生きて来られたのは放牧畜産があつたからだ。牛を放牧していると自然と牧草地ができて維持される。（北海道の場合は雨が多いので放牧をしたときに牧草地をぬかるませないように注意が必要だ。）反対に牧草を機械で収穫すると牧草地に雑草が侵入して、五年もすれば草地を耕して牧草の種を撒き直さなければならぬ（草地更新）。ここにも多くの金がかかる。自然を相手にする農業が、この牛と牧草が織り成す自然の生態系の奇跡、自然の力を最大限に利用するのが最善であることは明らかだ。（一方でアジアのモンスーン

地帯では、水田稲作を「奇跡の農法」と呼びたい。畑作と違い連作が可能だからだ。この奇跡がアジアの高い人口密度を支えてきた。）

一九六四年にニュージールランド人の草地学者のロックハート氏が、北海道知事の町村金五氏に招かれて一年と二ヶ月滞在した。その昭和三十九年は私の生まれた年、東京オリンピックの年であり、高度経済成長の真つ只中である。ロックハート氏は頑張れば頑張るほど、「北海道はやる気があるのか」と憤ったという。ロックハート氏の教えは、穀物を与えるのではなく放牧をして草地を改良し、生産を上げるという技術。ロックハート氏の指導は全く聞き入れられず、ちょうどその時期を境にして北海道は放牧酪農を捨てて、一頭当たりの乳量を追求して、通年舎飼をして穀物飼料を多給する酪農へと突き進んでいく。アメリカの穀物戦略に乗せられたのだろうか？日本の乳牛は九十九%がホルスタイン種である。それは一頭当たりの乳量が牛の品種の中で一番多いからである。そしてそのホルスタインを乳量を増やすために改良してきた。牛は草食動物なので、穀物のみを与えたら死んでしまう。しかし乳量を増やすためには、できるだけ多くの穀物を与えなければならない。要するに日本のホルスタインの改良の目指す所は穀物を沢山食べても死なない牛である。言葉は悪いが草食動物を豚化しているわ

けた。牛は草を消化するために草を食べる微生物を胃に住まわせた第一胃に始まり、胃袋が四つある動物です。豚ではありません。そして今の酪農の技術とは穀物を沢山やっても牛を殺さないための技術である。

農家の儲けよりも乳量を優先して、国が改良をしてきたホルスタイン。このホルスタインは日本の農業政策の象徴でもある。私の目には日本の農業政策の求めるものは、農家の経営を良くするのが目的ではなく、生産量を増やすことが目的であるように映る。

一方ニュージーランドの酪農を見てみよう。乳牛の品種改良の目標は、農家の経営を良くすることである。その結果ニュージーランドの酪農家で飼われている牛の主流はホルスタインの純血種ではなく、ホルスタインとの雑種である。雑種は両親の遺伝能力以上の力を発揮する。これを雑種強勢という。雑種は繁殖能力が高く、乳を生産する飼料転換効率も高い。飼料転換効率とは与えられた飼料を乳、肉の生産物に転換をする効率である。車でいうと燃費のこと。日本のホルスタインは燃費の悪い大型のアメリカ車、一方ニュージーランドの牛は日本のハイブリッド車にたとえられるだろう。ハイブリッドを日本語に訳すと雑種である。

このハイブリッドの牛と放牧を利用して、ニュージーランドの酪農家は世界で最も安い乳価で乳を生産してい

る。ニュージーランドの牛は、価格の高い穀物飼料はやらずに草のみで生産ができる、繁殖が良く一年一産できる、草を乳に換える飼料転換効率が良い、長生きができる、などの長所がある。われわれ放牧酪農家の念願がかって、二年前にニュージーランドの牛の精液を日本へ輸入することが許可された。これは日本の乳牛を変える大きな一歩であり、努力してくださった関係者のみなさんに心から感謝している。しかし輸入には日本の国の条件がついていて、先祖五代前まで純粋なホルスタイン種であるという証明が必要とされた。そのためニュージーランドで優秀な成績を持つ種オスの精液は輸入できない。

雑種を利用すれば四、五年で酪農家の経営は良くなる。それなのになぜ日本はホルスタイン種を変えられないのか？雑種は日本の肉牛市場でも、乳牛市場でも価値が認められていないので、二束三文の値段になってしまふこと。ホルスタインの子牛が生まれたというだけで、登録料を取れるホルスタイン協会やまたホルスタインの精液を生産し販売する組織の存在。一頭当たりの乳量が多いほど儲かると指導してきた国のメンツもあるのだろうか。なぜ国は酪農家の経営ではなく、生産量を優先させるのか。それは酪農の関連産業が量が必要としているからだろう。生産物を加工販売する乳業会社（しかし、不要な時は牛乳を廃棄させられる）、穀物飼料を販売する業者

(乳業会社が穀物飼料も販売している。飼料を売って、牛乳を買って儲けている)、建設業者から機械業者、穀物飼料や牛乳に手数料をかける農業団体、などなど農家の何倍もいる人たちは、農家が生産量を増やす努力をすればするほど、儲かる仕組みになっている。

牛への穀物飼料の多給について、視野を広げて考えてみたい。農林業が他産業と本質的に違うのは、ゼロから富を生み出すことだ。太陽と土と水から食料資源やエネルギーを生み出すことが可能だ。他の産業はすべて鉱物資源などの資源を使用(消費)して、資源を加工し付加価値をつけて、お金に換えて成り立っている。日本は恵まれた気象条件をもっている。森林を管理すれば日本は永続的なエネルギー資源(薪のこと)を手に入れることができる。農林業をお金儲けではなく資源という観点で見ても、永続して資源を生み出すことのできる循環型の農林業を築くことができれば、日本ほど強い国はない。穀物を輸入してその穀物資源を消費する酪農ではなく、食料資源を太陽と土と水から生み出す酪農を目指したい。「世界を動かしているのはお金ではなくて、資源とエネルギーと人口だ」とお金の専門家の税理士さんがラジオで言っているのを耳にしました。

日本の酪農家が穀物を過剰に与えている問題点を列挙してみたい。

一、世界の飢餓問題を引き起こしている大きな原因である。

世界の人口の七人に一人が飢餓状態にある。世界の穀物の生産量は、世界の全ての人口を養う量がある。飢餓を引き起こしているのは富の偏在である。世界で生産された穀物の半分は家畜の餌として利用されている。

加えて、牛に穀物飼料を与えて、乳・肉を生産するのは他の家畜に比べると飼料転換効率が悪いため穀物飼料の無駄が多い。肉牛では牛に食べさせた穀物のカロリーは肉になる時に約十分の一に減ってしまう。乳牛では食べさせた餌のカロリーは牛乳になる時には約三分の一に減ってしまう。一見これは良さそうだが、子供を産んで乳を出し始める前の二年間の餌の量も考えなければならぬ。餌を肉にする飼料転換効率は鶏が一番で、次にブタ、そして牛が一番悪い。ちゃんとスーパーで並んでいる肉の値段の安い順番になっている。

しかし、この牛の飼料を肉に転換する効率の悪さは、自然の摂理である。草食動物は草を食べ、そのほとんどを糞尿として充分に大地に返すことで、地力を収奪せずに草地を維持し、自らが生きていけるからだ。

二、日本の食糧自給率を下げている。

大量の穀物を輸入することが食糧自給率を下げている。そして輸入されるトウモロコシの内四分の三は家畜の餌として使われている。牛乳は百%国産と宣伝しているけれども、二〇〇三年の酪農の飼料自給率は三十四%で残りは海外で生産された餌に依存している。

三、糞尿が過剰に蓄積して環境問題を起こしている。  
外国から大量に輸入された餌から出される糞尿が、分解・浄化されるだけの農地面積が日本にはない。そのため農地に過剰に撒かれた糞尿が河川や地下水を汚染したり、農地の土壌の栄養バランスを崩している。

四、穀物を輸出している国の農地の劣化を引き起こしている。

穀物の輸入は水の輸入でもある。トウモロコシを輸入することは、六千tの水を輸入することに等しいという試算もある。世界の穀物生産地帯の湖は水位が下がり、地下水が減って地盤沈下を起こしている。また過剰な灌漑により塩害が起きているところもある。

日本は安いからといって農産物を輸入しているが、世界の農産物のコストを下けているのは機械作業の効率である。農産物の輸出国は平で広い農地があり機械の作業効率が良いというだけで、気候風土が農業に適しているというわけではない。

一方、日本は水の豊かな農業適地である。スイスの

山岳酪農を体験した人の著書を読むと、スイスに比べると気象条件の良い日本で酪農をするのは、「野天の金鉞掘り」だという。そんな日本が安いからといって外国から食料を輸入して、膨大な面積の耕作放棄地を出している。自国の食料は自国でまかなうのが自国のためだけでなく、世界のためにもなる。

最後に農家戸数の減少の話。ここ十五年間で足寄町の畑作農家も含めた農家戸数が四十六%減少する（半分になる）と中央農業試験場が試算している。十勝全体では三十七%の減少である。これからの農家は大規模化しなければ生きていけないのだろうか。農家のアンケート調査を見ると、儲かっていない酪農家ほど規模拡大の意向が強い。国が補助金を使ったり、大規模化の指導を進めていることもあり、儲からないのは規模が小さいからだと言っている農家は多い。

北海道で酪農をしていると、北海道では酪農のイメージが良くないことにはやでも気付かされる。足寄町の十軒の新規就農者たちも北海道出身者は一人もいない。大変な苦勞をして先人が開拓をしてきたこの北海道の大地。みんながやめた後に少数の大規模化した農家が生産量だけは維持している農村よりも、家族で余裕を持って経営のできる小規模の農家が沢山集まっている農村が

私にとっては理想だ。足寄町の新規就農者に限って言う  
と、大規模酪農に魅力を感じて酪農を目指す人はいない。

農家戸数の半減だけではなく、足寄町全体を見ても私  
が足寄に来た当時は九千人以上あった人口が十二年経っ  
た今は七千五百人と二割減少している。足寄高校を卒業  
して足寄に就職する人の数は、片手に満たない、就職先  
がないのだそう。足寄の町中で育った人たちが就農を  
目指してくれる、そんな酪農を目指したい。そして古き  
よき農村に新たな魅力を付け加えて農村人口を増やした  
い。そのためには一つ目は農家レストランや農家民宿な  
どの農村観光、二つ目は乳製品や肉製品などの農産物の  
加工を町場ではなく農村で営むことだ。町の住民との交  
流が農村を魅力あるものにする。美瑛町で行われている、  
「美瑛センチュリーライド」、「丘のまち びえい 国際  
スキーマラソン」に参加してそう思う。

今までの北海道の酪農家は儲けるためには穀物を沢山  
牛に与えて生産量をあげること、規模拡大をすることを  
指導されてきた。そしてこの指導が多くの農家を苦しめ  
てきた。農家戸数を減らさず、むしろ増やすためには、  
農家の所得率を劇的に上げることのできる放牧酪農しか  
ない。足寄町放牧研究会が成功した方法である。そのた  
めには酪農に関係する機関、組織、団体の全てがまず、

全ての酪農家が放牧のできる基盤整備作りなど放牧を普  
及するための真剣な努力をすること、同時に農家が儲か  
ることを目標にした牛の改良二つである。

私達は酪農を始めた時、生まれた時から今の酪農産業  
があるため、今の状態が常識で動かしがたい大きな壁に  
見える。今までは私一人が頑張っても無理だからと諦め  
ていた。しかし、しあわせになるためのしくみを知って  
しまった今は、今世生きていこううちにできる所まで努力  
をするしかない。諦めていたときと、「来世が楽だから」  
と今自分にできる限りの努力をしておこう思っている今  
では、日常生活の言動（大げさに言う立ち居振る舞い  
まで）が変わったのが自分でわかる。

黒澤西蔵さんが新規就農してからまだ百年あまり、北  
海道の酪農は始まったばかりである。今の酪農を築き上  
げてくれた先人たちの努力にこころから感謝して、これ  
から酪農家の戸数をこれ以上減らさずに魅力的な農村文  
化をはぐくむために、無限小の力でジワーツと現在の酪  
農産業の壁を押ししていきたい。まずは間違った指導、教  
育を鵜呑みにして苦しんでいる酪農家を少しでも減らす  
ために放牧を普及したい。

放牧の普及は酪農家のためだけではない。放牧草を食  
べている牛の乳や肉は、穀物を食べさせた牛の乳や肉に  
比べて人の健康に良い。その理由はまず放牧牛の乳、肉

にはベータカロチンが多いことである。ベータカロチンは人参に多く含まれ、オレンジ色をしている。ベータカロチンのために放牧牛乳、牛肉の脂肪は色が黄色味を帯びる。ベータカロチンは「万病のもと」といわれる活性酵素を除去する働きがある。次に舎飼の牛にはない共役リノール酸を含む。これはガンの予防作用がある可能性があるといわれる。もう一つ、オメガ三脂肪酸を多く含む。オメガ三脂肪酸は魚に多く含まれ、神経細胞の成長を助け（頭が良くなる）、血管を丈夫に保つなどの機能がある。そして何よりも大空のもとで大地を踏みしめて活力に満ちあふれている牛たちを見ていただけで、ましてやその牛たちの乳や肉（いのち）をいただくことで、自分まで元気をもらえるような感じがする。消費者の皆さんも放牧に応援をよろしくお願いします。

つつい大きいなことまで書いたけれども、今日一日を昨日よりもほんの少しだけ明るく、そして自分にやさしく人にやさしく、無限小の努力をしたい。

